

# 登録速報（適用拡大）

農薬名：ジベレリン明治液剤

登録番号：第 6005 号

適用拡大登録日：平成 23 年 2 月 2 日

適用拡大登録内容：以下のとおり追加・変更し、別紙「変更後」のとおりとする。

①作物名「温州みかん」の「ジベレリンを含む農薬の総使用回数」「1 回」を「3 回以内」に変更する。

作物名	使用目的	使用濃度	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農薬の総使用回数
温州みかん	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25～50ppm	収穫直後～ 収穫約 1 ヶ月後	1 回	立木全面散布又は枝別散布	3 回以内
	落果防止		開花始め～ 満開 10 日後		散布	
	浮皮軽減	ジベレリン 3.3～5ppm	収穫予定日の 3 ヶ月前 但し、 収穫 45 日前まで		果実散布 (プロトプロジェスモン 1000～2000 倍液 に加用)	

②作物名「かんきつ(不知火、ぼんかん、かぼす、はるみ、ワシントンネーブル、日向夏、すだち、平兵衛酢、長門ユヅ柑(無核)、温州みかんを除く)」を「かんきつ(不知火、ぼんかん、かぼす、はるみ、ワシントンネーブル、日向夏、すだち、平兵衛酢、長門ユヅ柑(無核)、温州みかん、きんかんを除く)」と「きんかん」に分離する。

③作物名「きんかん」、使用目的「着果安定」を追加する。

作物名	使用目的	使用濃度	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農薬の総使用回数
きんかん	着果安定	ジベレリン 300ppm	一番花開花期	1 回	花に散布	1 回

④作物名「かき（富有、早秋）」、「かき（太秋、新秋）」、使用目的「落果防止」を追加する。

作物名	使用目的	使用濃度	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農薬の総使用回数
かき（富有、早秋）	落果防止	ジベレリン 50～200ppm	満開 10 日後	1 回	幼果及びへたに散布	1 回
かき（太秋、新秋）		ジベレリン 200ppm				

⑤作物名「さくら（切り枝促成栽培）」の使用時期を「休眠期（温湯処理直後）」から「休眠期」に変更し、使用方法に「切り枝浸漬」を追加する。

作物名	使用目的	使用濃度	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農薬の総使用回数
さくら (切り枝促成栽培)	休眠打破による生育促進	ジベレリン 25～50ppm	休眠期	1 回	切り枝全面散布 切り枝浸漬	1 回

⑥作物名「さつき（施設栽培苗）」、使用目的「茎の伸長促進、花芽分化の抑制」を追加する。

作物名	使用目的	使用濃度	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農薬の総使用回数
さつき (施設栽培苗)	茎の伸長促進 花芽分化の抑制	ジベレリン 100～200ppm	茎の伸長初期 ～伸長終期 (開花盛期以降) 1～2 週間間隔	3 回	頂芽に十分散布	3 回以内

1. 当該変更に伴い、農薬登録申請書の記載事項に変更を生じるときは、その旨及び内容以下のとおり変更し、別紙のとおりとする。

〔2〕使用上の注意

(7) として「かき」を追加し、以降を順送りする。

〔7〕かき（富有、早秋、太秋、新秋）

- ① 散布時期が早すぎると結実しても果実が小さくなる恐れがあるので、使用時期を誤らないこと。
- ② 本剤の散布により結実が過多となった場合は果実が小さくなる傾向があるので仕上げ摘果を行い着果量を調節すること。
- ③ 散布は幼果及びへたを対象にして十分かかるよう入念に行うこと。」

を追加する。

(15) 花き

④ さくら(切り枝促成栽培)

「イ. 単独処理では効果が劣るので、温湯処理と組み合わせて使用すること。」を削除する。

〔⑤〕さつき

さつきの未開花苗に使用する場合は、茎の伸長状況を見ながら対象品種の成木の開花時期を参考に、使用時期を決めること。」を追加する。

別紙【変更後】

作物名	使用目的	使用濃度	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農薬の総使用回数	
かんきつ(不知火、ぼんかん、かぼす、はるみ、ワシントンネーブル、日向夏、すだち、平兵衛酢、長門ユズギ(無核)、温州みかん、きんかんを除く)	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25～50ppm	収穫直後～ 収穫約1ヶ月後	1回	立木全面散布 又は枝別散布	1回	
	落果防止		開花始め～ 満開10日後		散布		
不知火 はるみ	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 0.5～1ppm	収穫直後～ 収穫約1ヶ月後		立木全面散布 又は枝別散布		
	落果防止		開花始め～ 満開10日後		散布		
ぼんかん	水腐れ軽減	ジベレリン 0.5ppm	着色終期 但し、収穫7日前まで		果実散布		
	花芽抑制による樹勢の維持		ジベレリン 25～50ppm		収穫直後～ 収穫約1ヶ月後		立木全面散布 又は枝別散布
	落果防止		開花始め～ 満開10日後		散布		
長門ユズギ (無核)	水腐れ軽減	ジベレリン 0.5ppm	着色始期～ 4分着色期 但し、収穫21日前まで		果実散布		
	花芽抑制による樹勢の維持		ジベレリン 25～50ppm		収穫直後～ 収穫約1ヶ月後		立木全面散布 又は枝別散布
	落果防止		開花始め～ 満開10日後		散布		
すだち 平兵衛酢 かぼす	着果安定	ジベレリン 50ppm	開花期～ 開花終期	花又は 果実散布			
	果皮の 緑色維持	ジベレリン 10～25ppm	収穫予定 14～30日前	果実散布			
	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25～50ppm	収穫直後～ 収穫約1ヶ月後	立木全面散布 又は枝別散布			
ワシントンネーブル	落果防止	ジベレリン 500ppm	満開 10～20日後の幼果期	幼果に散布			
	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25～50ppm	収穫直後～ 収穫約1ヶ月後	立木全面散布 又は枝別散布			
日向夏	無種子化 落果防止	ジベレリン 300～500ppm	満開 7～10日後	果実散布			
	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25～50ppm	収穫直後～ 収穫約1ヶ月後	立木全面散布 又は枝別散布			
温州みかん	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25～50ppm	収穫直後～ 収穫約1ヶ月後	立木全面散布 又は枝別散布	3回以内		
	落果防止	ジベレリン 25～50ppm	開花始め～満開10日後	散布			
きんかん	浮皮軽減	ジベレリン 3.3～5ppm	収穫予定日の3ヶ月前 但し、収穫45日前まで	果実散布 プロビトロンジヤモン 1000 ～2000倍液に加用)			
	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25～50ppm	収穫直後～ 収穫約1ヶ月後	立木全面散布 又は枝別散布	1回		
	落果防止	ジベレリン 25～50ppm	開花始め～満開10日後	散布			
きんかん	着果安定	ジベレリン 300ppm	一番花開花期	花に散布			

作物名	使用目的	使用濃度	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農薬の総使用回数
かき (富有、早秋)	落果防止	ジベレリン 50～200ppm	満開 10 日後	1 回	幼果及びへたに散布	1 回
かき (太秋、新秋)		ジベレリン 200ppm				
野菜類	発芽促進	ジベレリン 50～200ppm	は種前		種子浸漬	
みつば (軟化栽培を除く)	生育促進	ジベレリン 10ppm	本葉 2～3 枚時 (第 1 回目) とその 2 週間後 (第 2 回目) 但し、収穫 14 日前まで	2 回	葉面散布	3 回以内 (種子への処理は 1 回以内、は種後は 2 回以内)
みつば (軟化栽培)		ジベレリン 20～50ppm	根株伏込時	1 回	根株上面に散布	2 回以内 (種子への処理は 1 回以内、根株伏込時は 1 回以内)
ふき	生育促進	ジベレリン 25ppm	葉数 3～4 枚時 (草丈 10～30cm 頃)		1 回	全面散布
うど (春うど)	休眠打破による生育促進	ジベレリン 50ppm	伏込時	根株散布		
		ジベレリン 50～100ppm		根株浸漬		
トマト	空どう果防止	ジベレリン 10ppm	開花時	1 花房当り 1 回	花房散布 (トマト落果防止剤と併用)	種子への処理は 1 回、1 花房当り 1 回
きゅうり (抑制栽培)	果実肥大	ジベレリン 50ppm	開花時	1 花当り 1 回	花に散布又は浸漬	種子への処理は 1 回、1 花当り 1 回
なす	着果数増加	ジベレリン 10～50ppm	開花時	1 回	葉面散布	2 回以内 (種子への処理は 1 回以内、は種後は 1 回以内)
しそ (花穂)	穂の伸長促進	ジベレリン 5ppm	出穂期 但し、収穫 7 日前まで		茎葉散布 (50L/10a)	
セルリー	生育促進 肥大促進	ジベレリン 50～100ppm	収穫予定 15～20 日前		葉面散布	
いちご (促成栽培)	着果数増加 熟期促進	ジベレリン 10ppm	休眠に入る直前 (冬場の低温期)	1 株当り 6 回以内	茎葉全面散布 (1 株当り 5mL)	1 株当り 10 回以内
いちご	果柄の伸長促進		頂花の出蕾直後～開花直前	1 花房 当り 1 回	株の中心部に 5mL 散布	
いちご (親株床)	ランナー発生促進	ジベレリン 50ppm	採苗時 ランナー発生直前～発生初期	1 株当り 1 回	茎葉散布 (1 株当り 10mL)	1 株当り 1 回
ごぼう (促成栽培)	休眠打破による生育促進	ジベレリン 10～15ppm	休眠に入る直前 (残葉 2 枚程度の頃) 及びその約 1 ヶ月後 (但し、収穫 30 日前まで)	2 回以内	茎葉散布	3 回以内 (種子への処理は 1 回以内、は種後は 2 回以内)
アセロラ	着粒安定	ジベレリン 25ppm	開花期	1 花当り 1 回	花に散布	1 花そう当り 3 回以内
メロン	着果促進	ジベレリン 200ppm	開花前日～翌日		散布 (4-CPA 剤 50 倍液に加用)	種子への処理は 1 回、1 花当り 1 回

作物名	使用目的	使用濃度	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農薬の総使用回数	
シクラメン	開花促進	ジベレリン 1～5ppm	9月中・下旬	1回	花蕾を含む芽の中心部に散布 株の中心部に散布	1回	
プリムラ (マコイデス)		ジベレリン 10～20ppm	11月上旬頃の花蕾出現直後				
みやこわすれ	開花促進 草丈伸長促進	ジベレリン 50～100ppm	1月中旬の保温開始時から7～10日間隔	3回	葉面散布	3回以内	
きく		ジベレリン 25～100ppm	生育期	2回以内	茎葉散布	2回以内	
しらん		ジベレリン 50ppm	植付時	1回	30分間株浸漬	1回	
チュウリップ (促成栽培)	開花促進	ジベレリン 400ppm	草丈7～20cmの時に7日間隔	2回以内	筒状の葉の中心部に滴下 (1球当り 1ml)	2回以内	
	花丈伸長促進及び 茎の肥大促進	ジベレリン 100ppm	草丈7～10cm時	1回	ホルクロルフェニロン 0.05～0.1ppm液に 加用、葉筒内滴下 (1球当り 1mL)		
さつき (施設栽培苗)	茎の伸長促進 花芽分化の抑制	ジベレリン 100～200ppm	茎の伸長初期～伸長終期 (開花盛期以降) 1～2週間間隔	3回	頂芽に十分散布	3回以内	
さくら (切り枝促成栽培)	休眠打破による生育促進	ジベレリン 25～50ppm	休眠期	1回	切り枝全面散布	1回	
かた	生育促進	ジベレリン 50ppm	植付時		球根浸漬		
			花茎伸長期		茎葉散布	1回	
スパティフィラム	開花促進	ジベレリン 250～500ppm	出荷予定期の2～3ヶ月前	1回			球根浸漬
トルコギキョウ	生育促進	ジベレリン 50～100ppm	生育期間中に ロゼット化した時				
アザレア	開花促進	ジベレリン 250～500ppm	開花予定日 約1ヶ月前		種子浸漬		
アイリス	生育促進	ジベレリン 50～100ppm	植付時				
花き類	発芽促進	ジベレリン 50～200ppm	は種前				

## 8. 使用上の注意

### 〔2〕使用上の注意

#### 別紙【変更後】

#### (1) ぶどう

ぶどうには場合によってはサビ果の発生等、果実に障害が起こることがあるので、使用しないこと。

#### (2) かんきつ

##### <落果防止>

- ① 本剤処理により生理落果が軽減され着果が安定するが、品種等により本剤に対する感受性が異なるので、初めての品種等に使用する場合は最寄りの指導機関の指導を仰ぐか自ら事前に薬効薬害を確認した上で使用すること。

② 果面の粗滑や果皮の厚さ等果実品質への影響が懸念される場合があるので、使用時期、濃度は守ること。

＜花芽抑制による樹勢の維持＞

① 衰弱した樹勢のものに使用しても期待した効果が得られない場合があるので、衰弱した樹には使用しないこと。

② 低温が続いた年（極端な低温の年）または花芽の減少が予測される裏年の場合は、遅い時期の低濃度処理を心がけること。

③ 散布の際は薬液が葉先からしずくとなり落下する程度に散布すること。

(3) 温州みかん

＜浮皮軽減＞

① 本剤処理により着色が遅延することがあるため、貯蔵用または樹上完熟の温州みかんで使用すること。

② 本剤処理により薬斑が残ることがあるため、使用に当たっては病虫害防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。

(4) ワシントンネーブルの落果防止の目的で使用する場合は次の点に注意すること。

① 異常に結果歩合の低いものは処理しても効果の上がないことがある。

② 通常幼果1果当り小型噴霧器で0.1～0.2mL程度を噴霧する。

(5) 長門ユズキチ（無核）

長門ユズキチの落果防止および着果安定の目的で使用する場合は、薬液が花または幼果から滴り落ちる程度に散布すること。

(6) 日向夏

日向夏の無種子化および落果防止の目的で使用する場合は、薬液が花または幼果から滴り落ちる程度に散布すること。

(7) かき（富有、早秋、太秋、新秋）

① 散布時期が早すぎると結実しても果実が小さくなる恐れがあるので、使用時期を誤らないこと。

② 本剤の散布により結実が過多となった場合は果実が小さくなる傾向があるので仕上げ摘果を行い着果量を調節すること。

③ 散布は幼果及びへたを対象にして十分かかるよう入念に行うこと。

(8) みつば（軟化栽培を除く）

葉の表裏に十分散布すること。高温長日条件下の散布は抽苔しやすくなるので、秋作を中心に処理した方がよい。

(9) みつば（軟化栽培）

灌水は処理の当日はさけ、翌日に行うこと。散布により発生茎数が多くなるので根株の伏込みは心持ち加減すること。

(10) セルリー

定植後1ヵ月以内に散布すると「ス」が入りやすくなるのでさけること。

(11) ふき

収穫間近に散布すると効果が減少することがある。

(12) 春うど

芽及び根株が十分したたる程度に散布又は瞬間浸漬すること。灌水は処理の当日はさけ、翌日に行うこと。伏込み後の目土の上からの散布は根株に吸収され難いのでさけること。

(13) トマト

トマトの落果防止剤を使用した後散布すると効果が若干劣るので、本剤を先に散布するか、混用して使用すること。

#### (14) いちご

##### <着果数増加・熟期促進>

- ① 処理したいちごの果柄がのび、花、果実が葉の上に出た頃寒波がくると特に寒害を受け易いので防寒に留意すること。
- ② 本剤の散布適期は休眠に突入して矮化が始まる直前であり、休眠に入ってからでは効果が期待できないので、時期を失わないよう、いちごの生育状況に応じて散布時期を決めること。  
又、第1回目処理後、生育状況をみながら必要に応じて追加処理をすること。
- ③ 過剰散布は根の発育抑制やくず果を増加させるので、使用濃度、散布液量を厳守すること。

##### <果柄の伸長促進>

処理したいちごの果柄がのび、花、果実が葉の上に出た頃寒波がくると特に寒害を受け易いので防寒に留意すること。

#### (15) ごぼう

- ① 厳寒期は被覆資材等を利用して防寒に留意すること。
- ② 第1回目処理後、生育状況をみながら必要に応じて追加処理をすること。

#### (16) 花き

- ① 処理濃度、量、回数は必要最小限にとどめ、徒長や軟弱化を防ぐため栽培管理には十分注意すること。
- ② 処理の際には花蕾のある中心部めがけて噴霧すること。
- ③ チューリップ

##### <開花促進>

- イ. 本剤のチューリップへの利用は促成栽培（促成栽培、半促成栽培）に使用する。
- ロ. 処理時期は草丈が7~20cm（適期：10~15cm）の頃である。
- ハ. ジベレリン溶液は筒状の葉の中心部に1回又は2回（7日おき）滴下する。滴下量が多くなると薬液があふれ通常は溜る量が過剰分に引きづられて流出し、効果が不安定になるので注意する。  
1.0mLの滴下であふれる場合は、保持される最大量に止めること。
- ニ. 滴下前に灌水をすませ、筒状の葉の中の水はあらかじめ取り除いておく。滴下後は2~3日灌水をひかえる。
- ホ. 品種により、感受性の差異が見られるので感受性の強い品種（ウィリアムピット、ゴールデンハーベスト等）を選んで使用するのが有利である。

##### <花丈伸長促進及び茎の肥大促進>

- イ. 本適用は促成栽培を対象とし、花丈伸長及び茎の肥大を促し「切花」の品質向上を目的とする。
- ロ. 微量で鋭敏に作用し、過量の場合、花卉の奇形や肥厚の生育異常、葉や花の着色不良若しくは色抜けの生理障害等の薬害が発生しやすいので、使用時期、使用濃度及び使用方法を厳守し、滴下処理に際しては、液が葉筒内より漏出しないよう注意すること。薬害回避には草丈7~8cmとやや早い時期の低濃度処理をこころがけること。
- ハ. 本適用の効果には品種間差異があるので、促成栽培品種であっても事前に最寄りの指導機関等の指導を受け、効果及び薬害の有無を確認してから使用濃度等を決めること。

#### ④ さくら(切り枝促成栽培)

休眠が深い時期の処理は効果が出にくいので、自発休眠の浅い時期に処理すること。

#### ⑤ さつき

さつきの未開花苗に使用する場合は、茎の伸長状況を見ながら対象品種の成木の開花時期を参考にして、使用時期を決めること。